一九世紀フランスのファキュルテ

渡辺和行

【もくじ】

はじめに
一　ファキュルテの実態
二　改革への序曲
むすび

10—3・4—603（香法'91）

はじめに

第三共和政初期の教育改革は、共和主義的な文化統合にむけた知の制度化として捉えることができる。なぜなら、普仏戦争とパリ・コミューンの余燼さめやらぬなかから生まれた第三共和政は、誕生の経緯からして、二つの課題をもったからである。その課題とは、フランスの科学を振い興してドイツに追いつくこと、共和主義的な国民形成によってフランスの統一を図ることの二つである。この二課題は、教育改革として具体化する。これらの課題に献身したのが、広義の歴史家であったことについては、すでに触れた[1]。

本稿は、改革を必定としたフランスの高等教育、とりわけファキュルテ（単科大学）の実態を解明することを目的としている。第一節で、一九世紀フランスのファキュルテの実態が、文・理ファキュルテを中心に明らかにされ[2]、第二節で、一八六〇年代に始められた教育改革が素描される。この作業を通じて、われわれは第三共和政前期に展開された教育改革の背景をよりよく知ることができる。その意味でも、本稿は、筆者にとって不可欠の作業である。

（1）渡辺和行「一九世紀後半フランスの歴史家と高等教育改革」『思想』第七九九号、一九九一年。

（2）周知のごとくフランスの高等教育機関は、ファキュルテと高等専門学校から成りたっているが、歴史学という窓を通して見た高等専門学校の実態については、渡辺和行「科学と祖国」、谷川稔その他『規範としての文化』（平凡社、一九九〇年）所収、を参照されたい。

一　ファキュルテの実態

「フランスには高等教育は存在していない」[1]。これは歴史家のガブリエル・モノーが、一八七四年頃に私立政治学院で述べた言葉である。たしかに今日的意味でのユニヴェルシテ（総合大学）がフランスに誕生したのは、一八九六年のことである。フランス革命によって二二の大学が廃止され（一七九三年）、ナポレオンによって独立したファキュルテが設けられて以降、一八九六年七月まで、フランスには言葉の厳密な意味での大学はなかった。すなわち高等教育の分野では、フランス革命から第一帝政の時代に作られた構造が、ほとんど変化することなく存続していたのである。いま少しく、この経緯を追ってみよう[2]。

フランス革命は中世的なるものの一切を否定し退けたが、大学組織もその例外ではなかった。中世社会に起源をもち、旧制度末には沈滞しきったフランスの大学は、革命によって廃止された。自然科学の影響を拒み続ける医学部[3]や自然法も教授されることのない法学部に、死亡宣告が発せられたのである。ディドロがロシアのエカテリーナ二世に、フランスの大学制度ではなくて、ドイツの大学制度をモデルとすべきであると助言せざるをえなかったところにも、旧制度下の大学の沈滞は表れている。このような状態は一八六〇年代まで続き、ドイツ語が世界の学術用語となりつつあり、ロシアとオランダの大学は、フランスからではなくてドイツから教授を招聘している有様であった[4]。

フランス革命の過程で、さまざまな教育理念や学制改革案が表明された。自由主義的知育主義の公教育を掲げるコンドルセ案や、統制主義的訓育主義を標榜するルペルチエ案を両極として、タレイラン、ラカナル、ドヌー、フルクロワなどの多様な改革案が提出された[5]。まさに今日、「フランス公教育政策の源流」（吉田正晴）と称される白熱した

議論が展開されていた。もっとも革命期に表明されたもろもろの教育理念は、それを主張する政治勢力の消長と休戚をともにした。それはちょうど、革命の転変とともに革命期の諸憲法がたどった運命と同様であった。したがって革命期には、諸科学の全体に寄与する百科全書的な教育制度が志向されつつも、高等教育の抜本的改革は実現されず、一七九五年に、高等師範学校と理工科学校の創立をみたにとどまった。(6) しかし少数の超エリートを養成する高等専門学校と一般エリートを対象とした大学という、高等教育の二重構造が築きあげられたことの重要性を、われわれは無視することはできない。この二重構造は、一九世紀を通じて強められこそすれ、弱まることはなかったからである。

フランスにおいて近代的大学の土台は、一八〇六年、ナポレオンの「帝国大学=ナポレオン学制」によって据えられた。この「帝国大学」とは、中央集権的な単一の行政機関であり、今日、われわれがイメージする大学とは無縁のものである。この時代、大学に相当したのは、一五のアカデミー（大学区）に設けられたファキュルテであった。このファキュルテは、一八〇八年のデクレによって創設された。神・法・医・文・理の五つのファキュルテがあった。法科と医科のファキュルテは、旧制度下の法学校や医学校の名称替えにすぎなかったし、文科と理科のファキュルテは、新設ではあるが、その前身は旧制度下の人文学部であった。

表Ⅰは、一九世紀のファキュルテの数と創立した年を示したものである。この表から、一八六〇年以前には、文・理ファキュルテは各アカデミーに一つずつあったが、法科と医科のファキュルテは、それぞれ八つと三つしかないことが分かる。しかしこの八法科と三医科は、すべて一八〇三年と〇四年に設置されたのにたいして、文・理ファキュルテは、第一帝政・七月王朝・第二帝政の三つの時期にまたがって、約三分の一ずつ整備されてきたという違いがあった。このことは、文科と理科の教育が、法科や医科の教育よりも軽視されていたことを窺わせる。また一八七〇年以前に、五つのファキュルテを擁したのはパリのみであり、他の都市は二〜四のファキュルテを有するにすぎない。

表Ⅰ　19世紀フランスのファキュルテの創立年と大学数

（＊印の横の年数が創立年）

	法科	文科	理科	医科	合計
1 パリ	＊1804	＊1809	＊1808	＊1803	4
2 エクス，マルセイユ	＊1804	＊1846	＊1854		3
3 ブザンソン		＊1809	＊1845		2
4 ボルドー	＊1870	＊1838	＊1838	＊1878	4
5 カーン	＊1804	＊1810	＊1810		3
6 クレルモン＝フェラン		＊1854	＊1854		2
7 ディジョン	＊1804	＊1810	＊1838		3
8 ドゥーエ，リール	＊1865	＊1856	＊1854	＊1876	4
9 グルノーブル	＊1804	＊1847	＊1811		3
10 リヨン	＊1875	＊1838	＊1834	＊1877	4
11 モンペリエ	＊1878	＊1838	＊1808	＊1803	4
12 ナンシー	＊1864(1804)	＊1854	＊1854	＊1870(1803)	4
13 ポワティエ	＊1804	＊1845	＊1854		3
14 レンヌ	＊1804	＊1838	＊1840		3
15 トゥールーズ	＊1804	＊1810	＊1810		3
合計	13	15	15	6	

出典　Albert Dumont, Notes sur l'enseignement supérieur en France, *RIE*, 8 (1884), pp. 194-203. より作成。

注：　神学ファキュルテは省略したが，カトリック系5（パリ・ボルドー・エクス・ルーアン・リヨン），プロテスタント系2（パリ・モントーバン）の計7である。〈12　ナンシー〉の項の（　）は，ストラスブールのファキュルテの創立年である。

なお法科と医科は，まず法学校と医学校として再建され，1808年にファキュルテに移行した。

しかし、おのおののファキュルテは有機的な繋がりを欠き、共通の原理や共通の目的ももたず、互いに孤立して存在していた。ともあれこの一八〇八年のデクレによって、ファキュルテと高等専門学校の併存という、一九世紀フランスの高等教育を特色づける機構が作られた。この制度的二重構造は、機能と役割の二重構造をも意味した。実用的な職業教育（法・医）と一般的な教養教育（文・理）を行うファキュルテと、官僚・軍人・教授を養成する高等専門学校という、高等教育の分業が確立した。国家に枢要な人材の育成は、高等師範や理工科学校が担当し、少数の超エリートの養成に国家が尽力するという専門学校主義が貫かれた。

このためファキュルテは、低い地位に甘んじざるをえなかった。神・法・医の三つのファキュルテは、それぞれ司祭・法曹家・医師を養成する職業訓練センターであった。文・理ファキュルテはリセの延長であり、旧制度下の人文学部と同じく下級ファキュルテと見なされていた。自然科学を重視した専門研究がなされたのも、理工科学校、コレージュ・ド・フランス、自然史博物館といった高等研究機関であって、理科ファキュルテではなかった。医科ファキュルテは、科学の発達にみあった努力をほとんどしない保守的な組織であった。したがってファキュルテの存在理由かつ主要機能は、研究することにではなくて、法科や医科のように職業資格証明を与えることか、文科や理科のように学位を授与することにあった。ファキュルテは、高等専門学校がもたないバカロレア（大学入学資格）・リサンス（学士号）・ドクトラ（博士号）などの学位授与権を独占していたのである。とくにバカロレアの審査に携わる文・理ファキュルテは、まさに試験機関であり、バカロレアを通じて、リセやコレージュといった中等教育と密接に結びついていた。ナポレオンの法案では、文・理ファキュルテは、リセに併設されることが求められていたほどである。さらに初期の文学士号は、一種の上級バカロレアであり、ファキュルテで学ぶことなく、リセ卒業者でも合格しえたような水準であった。リアールは、初期の文学博士号もリセの勉強で十分であったと述べている。(7)

このため文・理ファキュルテでは、リセとファキュルテの教科目の相同性が著しかった。たとえば、一八七〇年頃ですら、リセの文科と文科ファキュルテには「標準的な五教科」があり、それらは哲学・歴史・外国語・文学・文法であった。[8] また文・理ファキュルテとリセの教官の移動が頻繁にあったことも、このような傾向に拍車をかける一因であった。したがって人文主義的な古典教育を重視するリセの教育[9]が、ファキュルテにも反映せざるをえない仕組みになっていた。文・理ファキュルテの教授数は、バカロレアの試験科目数とほぼ同じであったし、パリ文科ファキュルテ（以下、ソルボンヌL）や高等師範学校でも、古典や文学の講座が過半数を占めていた。したがって文科ファキュルテでは、アグレガシオン（教授資格試験）もドクトラも、古典学の範囲内に限られており、学問の専門分化にとって桎梏となった。文科のアグレガシオンの試験科目も、「標準的な五教科」であった。いきおい、リセの伝統的教科目に応じた学問分野に、自己の研究を限定せざるをえない。歴史や哲学も、このような古典的教養の重視という教育の影響を受け、古代の歴史や哲学が中心であった。[10] 歴史においては、この人文主義的教育の影響は、偉大な時代や偉人、君主などに注目する政治史として現れた。[11]

ファキュルテは、教育面でも予算面でも貧相であった。まずファキュルテの教育を一瞥しよう。表IIは、一八六五年の高等教育機関の教授数の一覧である。表Iの六五年までのファキュルテの数によって、一ファキュルテ当たりの平均教授数を求めると、それは、法科で八・五人、医科で二〇人、理

表II　1865年の高等教育機関の教授数

高等教育機関	教授数(人)
神学	28
法科	85
医科	61
理科	103
文科	79
ファキュルテ合計	356
コレージュ・ド・フランス	30
高等師範学校	23
古文書学院	7
自然史博物館	17*

出典　Weisz, *The Emergence*..., p. 28.

注：*は1875年のデータである。

科で六・八人、文科で五・二人となる。ここでも、法科と医科の優越を読みとることができる。一般に文・理ファキュルテには、それぞれ四〜六名の教授が配置され、すべての科目を講義した。たとえば、歴史と地理を一人の教授が担当したり、地方の理科ファキュルテでは、植物学・動物学・地質学を一人の教授が担当するという有様であった。憲法・法制史・海法が教えられている法科は、どこにもなかった。

ソルボンヌLすら、当初は、コレージュ・ド・フランスの教授三名とリセの文学教授三名の六名しかいなかった。ソルボンヌLの教授は、一八一四年に八名、一八三〇年に一二名となり、この後、半世紀、教授数は同数のままであった。[12] 一八三〇年のパリ以外の文・理ファキュルテの教授数は、文科で二三人、理科で三〇人しかおらず、五二年でも、文科で六〇人、理科で六二人しかいなかった。一八七六年でも、パリを除いたフランスの教授数は一五九人であったという。[13] 本来、ファキュルテの教授になるためには、博士号の取得を要件としていた。しかし教授職と博士号取得との間には、厳密な結びつきはなかった。当時の博士号は、学問研究の成果とは見なされておらず、学問研究は、パリ以外のファキュルテでは、教員選考の規準ではなかった。[14] このような貧弱な教官陣の立てなおしが、のちに問題とされるであろう。それは、教授養成システムの問題であった。ファキュルテには、研究者を養成する機構はなかったのである。ファキュルテの増設・助教授職の設置・講座の新設といった第三共和政の諸改革によって、ファキュルテの教授数は激増する(表III)。一例を挙げると、助教授職の設置によって、七七年に、四七人の助教授が採用されている。[15] 表IIと表IIIの教授数を比較すると、二〇年の間に法科で二・五倍、理科で二倍、文科で二・八倍、医科で六倍となっている。それは、講座や講義科目の充実となって現れるはずである。

以上のような理由によって、改革以前に、ファキュルテで開講される講義の内容と講義数は不十分であり、リセの教授がファキュルテの教授を兼任することもあった。ドイツ語の教授や英語の教授のいないファキュルテも、それぞ

表III　1884年ファキュルテの教授数（人）と予算（フラン）

	法科	理科	文科	医科	合計
1　エクス，マルセイユ	15	14	9		38
2　ブザンソン		10	13		23
3　ボルドー	14	15	18	50	97
4　カーン	15	11	14		40
5　クレルモン＝フェラン		8	11		19
6　ディジョン	13	8	13		34
7　ドゥーエ，リール	17	12	15	45	89
8　グルノーブル	14	11	8		33
9　リヨン	15	20	19	64	118
10　モンペリエ	14	16	15	43	88
11　ナンシー	14	17	12	41	84
12　パリ	34	38	38	120	230
13　ポワティエ	13	9	11		33
14　レンヌ	15	9	11		35
15　トゥールーズ	17	14	18		49
合計	210	212	225	363	1,010
予算	1,739,740	2,116,945	1,397,475	2,804,715	8,058,875

出典　Dumont, Notes sur l'enseignement supérieur. . . , pp. 205-206. より作成。

れ二つあった。モンペリエのファキュルテでは、英語とイタリア語が同一の講座であった。フランス語の歴史は、フランス本国においてよりもドイツでより良く研究されていたために、フランス語を研究するためにはドイツ語を知る必要があったほどである。地方の文科ファキュルテには、スラヴ研究・サンスクリット語・東洋哲学の講座はほとんどなかった。地方ファキュルテの例として、リヨ

ンの理科と文科の講座を紹介しておこう。一八七四年でさえ、リヨンの理科は七講座（純粋数学・応用数学・物理学・化学・地質学・動物学・植物学）、文科は五講座（哲学・歴史・古代文学・フランス文学・外国文学）しかなかった。[16] 歴史と地理、ギリシア研究とラテン研究といったように、地方ファキュルテの教育が専門分化をとげるのは一八八〇年以後のことである。

文科ファキュルテのなかでも別格であったはずのソルボンヌLでも、七月革命までの講義数は六〜九であったし、一八七五年でも講座数と講義数はともに一二しかなかったのである。一八三〇年頃の九講義は次の通りである。ギリシア文学・ラテン弁論術・ラテン詩・フランス弁論術・フランス詩・哲学・哲学史・古代と近代の歴史・古代と近代の地理。一八七五年の一二講座は次の通りである。ギリシア詩・ラテン詩・フランス詩・ギリシア弁論術・ラテン弁論術・フランス弁論術・外国文学・哲学・哲学史・古代史・近代史・地理。[17]

ここで、一八三〇年代のファキュルテの講座数を見ておこう。なぜならソルボンヌLの例にも示されたように、三〇年代末のサルヴァンディの改革以後、ファキュルテの講座数は、ほとんど変わらなかったからである。ソルボンヌLの講座数は、一八一四年に一一講座となり、七月革命後、一講座増えて一二講座になった。地方の文科ファキュルテのなかで最古参のブザンソンでも、三〇年代には、四講座（歴史・哲学・ラテン弁論術・フランス弁論術）しかなかった。パリ理科ファキュルテ（以下、ソルボンヌS）は、一四講座をもち、モンペリエとリヨンの理科が七講座、トゥールーズの理科は五講座、カーンとディジョンの理科は四講座、グルノーブルの理科が三講座といった状況であった。しかし三〇年代末には、地方の理科ファキュルテは、五から七の講座をもった。法科ファキュルテでは、パリが一七講座をもっていたが、内容的に重複するものもあり、実質的には一〇講座に整理できた。それらの講座は、ローマ法・民法・刑法・商法・行政法・国際法・パンデクテン法学・ローマ法史・フランス憲法史・比較法である。地

方の多くの法科は、ローマ法・民法・刑法・商法・行政法の五講座しかもっていないが、これらに国際法を加えて六講座の法科ファキュルテもあった。医科ファキュルテでは、パリが二八講座、モンペリエが一六講座、ストラスブールが一四講座をもっていた[18]。講座数のうえでも、パリの諸ファキュルテが優遇されていたことが分かる。

リアールは、第二帝政末にはファキュルテ全体で四〇六講座しかなかったが、一八九〇年までに二二一の講座が新設されたと述べている[19]。もっともこの動きは、すべてのファキュルテで同時並行的に進んだのではない。ゆっくりと、しかも、パリ、リヨン、ボルドー、トゥールーズといった主要なファキュルテに限られていた[20]。一九世紀を通じてフランスの大学では、「学科目の画一的な同質性[21]」があったと言われるゆえんである。

改革以前のファキュルテの講義は公開講義が一般的であり、堅実な学問よりも雄弁に喝采を送る一般市民を対象としているために、その水準は低かった。医科ファキュルテすら、一般聴衆向けの公開講義があったのである[22]。ルナンも述べている。「文科ファキュルテの教育は、近代科学の教育ではなくて四〜五世紀の雄弁家の教育である[23]」。しかも文・理ファキュルテには、今日的意味での学生は存在せず、匿名の聴衆を相手とした講義であった。文・理ファキュルテにあっては、当時の学生とは、学位試験の受験届を提出した者のことを指しており、文科ファキュルテ全体でも一五〇人ほど、理科ファキュルテ全体では一〇〇人ほどしか学生はいなかった。

しかしファキュルテには、高等師範の学生（ノルマリアン）が享受しえたリサンスやアグレガシオンのための課程はなかった。一八六〇年代末でも、文科ファキュルテが非ノルマリアンに授与した学士号の数は、一〇〇ほどである[24]。しかもノルマリアンは、入学後三年でアグレガシオンに挑戦できるのにたいして、ファキュルテの学生は学士号取得後、五年間の教育経験を義務づけられ、その後でしかアグレガシオンを受験できなかった。カラディによれば、アグレガシオン合格者の平均年齢は、ノルマリアンで二三歳、非ノルマリアンで三二〜三四歳と一〇歳近くの開きがあっ

たのである。[25] このようなノルマリアンと非ノルマリアンの格差ゆえに、ファキュルテの「学生」は、なかなか増えなかった。一八七六年でもクレルモン＝フェランの文科には、正規の学生は七人しかいなかった。一八七七年に、やっと全国の文科の学生と理科の学生は、それぞれ二八六人と三八四人になったのである。[26] 一八七九年のソルボンヌLですら、学生は一二〇名を数えるに過ぎない。[27] しかもこれら学生の大半は、リセの教師であった。デュルケームが、学生のいない地方の文科ファキュルテの哲学講義と比べて、ドイツの大学の哲学講義に集まった学生（「真の学生」）に驚嘆したのは、なんと一八八六年のことである。[28] これにたいして法科と医科のファキュルテは、固有の学生をもち、その学生数の推移を示したものが表Ⅳである。これらの法科と医科の学生の七割が、パリに集中していた。

表Ⅳ　法科と医科の学生数の推移

（人）

年　数	法　科	医　科
1836	4,935	2,334
1846	4,132	1,052
1855	3,231	?
1865	4,913	1,766
1875	5,239	2,629
1890	4,570	5,843

出典　Weisz, *The Emergence...*, p. 46, p. 49.

これらの学生が、いかなる階層の出身であるかについては、ワイスの研究に詳しい。[29] それによると、一般に豊かな階層出身の学生が多かったという。なぜなら一八六五年に、国立のリセに通わせるために下宿させると、年に七三九フラン、公立コレージュでも年に六四九フランを要し、当時の労働者の年収（九〇〇～一、二〇〇フラン）では、子弟に高等教育を受けさせることは、むずかしかったからである。またファキュルテの間でも、階層差が存在し、文科と理科の学生より法科と医科の学生の方が、上の階層に属したようである。この階層差は、学位取得の受験料にも反映されていた。表Ⅴのように一八五四年後のデータによると、医学博士号を取得するには一、二六〇フラン、法学博士号で五六〇フラン、文・理の博士号で一四〇フラン必要であった。

今日考えられるような正規の学生登録が、ソルボンヌにおいて制度化されるのは、一八八三年のことである。「学生」

の誕生は、ファキュルテの教授に後継者と協力者を与えることを意味した。つまりそれは、高等師範以外で、研究者を方法的に養成する試みでもあった。この結果、八三年に、ソルボンヌLの学生は七三八人となったし、フランス全体でも文科ファキュルテの学生は一、五四七人、理科ファキュルテの学生は一、〇八九人と一〇倍近く増えた。この数値に、理工科学校や高等師範その他の文・理系の学生数を合算すると、三、九〇〇人ほどになるが、それでも八、九四一名の学生を擁するドイツの哲学部の半数に満たない。[30]しかし前年の八二年には、正規の学生を対象とした閉鎖講義がソルボンヌに導入され、ファキュルテの教育は、変貌を遂げつつあった。[31]歴史家のラヴィスが、パリのジェルソン街に設けられた板ばりの仮校舎で始まった「真の学生」を対象とした閉鎖講義を讃え、「この青年たちが、ソルボンヌを若返らせる」と記したのは、ちょうどこの頃のことである。[32]ラヴィスの讃辞から二年後の八四年には、ジェルソン街から三六名のアグレガシオン合格者を出すにいたり、研究者の養成という点でも、ファキュルテが高等師範の独占を突き崩しつつあることに、改革派の意気も高かった。[33]

次に予算を見てみよう。予算のうえでもファキュルテは、劣悪な条件をよぎなくされていた。政府が、ファキュルテに支出する予算は表VI（次ページ）のごとくである。たしかに国がファキュルテに支給する額は、一八六〇年代になって増加し、七七年の歳出額は、三五年の約四倍、六七年比でも二倍になっている。しかし六六年まで、実際には政府はファキュルテに二二万一千フランしか支出しておらず、全予算三八〇万フランのうちの約三六〇万フランは、学生の授業料や受験料などの収入によって賄われていた。一八三八年以前のように、ファキュルテの収入が支出より

表V　受験料（フラン）

	バカロレア	リサンス	ドクトラ
文・理	60-100	72-140	120-140
法	326-540	488-560	508-560
医	—	—	1,260

出典　Raphael et Gontard, *Hippolyte Fortoul 1851-1856* (Paris, 1975), p. 231.

も多く、国家がファキュルテから利益を得ていた時代もあったほどである。[34] 表IXの法科ファキュルテも、二六万フランの余剰を生んでおり、国が潤ったケースと考えてよいであろう。それにもかかわらず、一八六四年にナンシー法科ファキュルテの新設が認められたときも、建物を負担したのは市当局であって政府ではなかった。

表VIIは、一八六五年に政府が各ファキュルテに支出した平均額を示している。文科ファキュルテが一番少額であり、法科ファキュルテの二分の一ほどである。一番多く支給されているのは、やはり医科ファキュルテであり、理科ファキュルテの五倍に達している。予算は、教官数に比例して配分されているようであり、各ファキュルテの平均教官数は、ワイスによれば、文科で五人、理科で八人、法科で一〇人、医科で二六人であった。表VIIの平均予算額を、表VIIIの一八五一年の高等専門学校その他の研究機関の予算と比較すると、ファキュルテの貧弱さが一層

表VI　ファキュルテの予算（フラン）

年　　数	予　算　額
1835	2,004,623
七月王政期	2,876,018
第二帝政期	2,836,471
1854年法以後	3,633,308
1867	3,828,821
1870	4,215,521
1871	4,300,000
1873	4,444,921
1875	5,124,581
1877	7,799,180
1878-79	8,625,330
1884	9,199,665
1889	11,391,495

出典　Liard, *Universiés et Facultés*, pp. 34, 45-46. より作成。

表VII　1865年ファキュルテへの政府の年平均支出額

文科ファキュルテ	47,500フラン
理科ファキュルテ	55,000
法科ファキュルテ	83,000
医科ファキュルテ	280,380

出典　Weisz, *The Emergence*..., p. 41.

表VIII　1851年の高等専門学校等の予算

学士院	563,264フラン
自然史博物館	469,772
高等師範学校	219,499
コレージュ・ド・フランス	179,999

出典　Weisz, *The Emergence*..., p. 41.

表IX　1877年ファキュルテの収入率と予算配分率（%）

	法科		文科		理科		医科	
	収入	予算	収入	予算	収入	予算	収入	予算
1 パリ	46	31	27	24	38	31	79	49
2 エクス，マルセイユ	6	5	5	4	6	5		
3 ブザンソン			2	3	2	3		
4 ボルドー	8	7	8	7	6	6		
5 カーン	5	7	6	6	4	5		
6 クレルモン＝フェラン			3	4	3	4		
7 ディジョン	3	6	4	4	3	3		
8 ドゥーエ，リール	5	5	7	7	6	5	3	12
9 グルノーブル	3	5	3	4	1	4		
10 リヨン	3	6	6	8	5	7	1	9
11 モンペリエ			4	5	5	6	13	17
12 ナンシー	3	5	4	6	5	6	4	14
13 ポワティエ	5	6	8	5	6	3		
14 レンヌ	4	5	5	5	4	4		
15 トゥールーズ	10	10	8	7	6	7		
収入総額（フラン）	1,666,000		968,000		423,000		950,000	
予算総額（フラン）	1,406,000		1,036,000		1,670,000		1,720,000	

出典　Weisz, *The Emergence...*, p. 39. より作成。

際だつ。表からも明らかなように、学士院と自然史博物館の予算は、すべての文・理ファキュルテの全予算に等しかったのである。しかも表IXが示すように、実際には、予算はファキュルテに平等に配分されるのではなく、パリが突出していた。したがって地方のファキュルテは、目を覆うような状態をよぎなくされるのである。

乏しい予算は必然的に、貧弱な設備と劣悪な教育研究環境をもたらす。[35] 一八六九―七〇年のパリ法科ファキュルテの図書費は一、〇〇〇フランであり、購入雑誌二〇誌のう

ち、外国の定期刊行物は含まれていなかった。ストラスブール文科ファキュルテの年間図書購入費は、一〇〇フランでしかなかった。またマルセイユとリヨンの理科ファキュルテでは、図書費はゼロの状態であった。一八五五年のクレルモン＝フェランの文科は、二万二千フランの全予算を五人の教授に支払って費消した。地方の理科ファキュルテは、光熱費・講義・実験室の諸経費として一、八〇〇フランで満足せねばならなかった。ソルボンヌSにも自然史博物館にも、満足のゆく実験室はなかった。一八七三年ですら、ソルボンヌSは、以前、学生の寝室と台所として使われていた建物をあてがわれていた。地方の理科ファキュルテは、建物として、宮殿の屋根裏(リヨン)、台所や召使の部屋として利用されていた市庁舎別館（ボルドー）、老朽化した市庁舎の一部（モンペリエ）、リセの片隅（リヨン）、古い修道院（トゥールーズ）を使用していた。さらに一八八五年でも、ソルボンヌSの設備は一八四七年とほとんど同じであった。ドゥーエ文科ファキュルテの建物は、打ち捨てられた公営質屋であった。また文科ファキュルテにも、大階段教室があるだけで、小講義室や演習室をもつところはなかった。これは文科ファキュルテが、公開講義を主要な職務としていることの表れであるが、その階段教室も、地面の下に作られて暗く湿っぽかったり(リール)、狭くて暗くてリセの教室より劣っていた(ディジョン)。図書館をもたぬファキュルテも多く、仮にあっても、図書を配架する部屋がないか、管理する司書がいないかであった。

結局、ファキュルテは、人間と自然についての知の蘊奥を究める所ではなかった。一九世紀フランスのファキュルテの実態は、以上のようであった。まさに「フランス近代大学の停滞」（田原音和）と要約しうる状況が、存在したのである。[36]

(1) Gabriel Monod, De la possibilité d'une réforme de l'enseignement supérieur, *Revue politique et littéraire*, 5 (1873-1874), p.

1103. リアールは、このモノー論文を「真に予言者的なページを記した」と讃えている(Louis Liard, *Universités et Facultés*, Paris, 1890, p. 33.)。

(2) 以下の記述に際して参考にした文献は、渡辺和行「フランス実証主義史学の文献案内」『香川法学』第八巻第二号（一九八八年）に掲げた教育史関係の文献である。とくにGeorge Weisz, *The Emergence of Modern Universities in France 1863-1914* (Princeton, 1983); Antoine Prost, *Histoire de l'enseignement en France 1800-1967* (Paris, 1968); T. N. Clark, *Prophets and Patrons: The French University and the Emergence of the Social Sciences* (Massachusetts, 1973); Louis Liard, *L'enseignement supérieur en France 1789-1893* (Paris, 1884-1894); Liard, *Universités et Facultés*. それにVictor Karadyの諸論文、田原音和『歴史のなかの社会学』（木鐸社、一九八三年）などは有益である。

(3) たとえばド・ラ・メトリが一七三三年に卒業したランスの医学校の論文題目は、「恋愛は健康によいか」、「牡蠣を食べるときには白ブドー酒を飲まねばならぬか」といったものであったという。ド・ラ・メトリ『人間機械論』杉捷夫訳（岩波文庫、一九八八年版）九ページの訳者解説。

(4) Georges Pouchet, L'enseignement supérieur des sciences en Allemagne, *Revue des deux mondes*, 83 (1869), p. 433, p. 449. 以下、この雑誌を*RDM*と略記する。

(5) 梅根悟監修『世界教育史大系　9　フランス教育史』同『世界教育史大系　26　大学史』（講談社、一九七四―七五年）。吉田正晴『フランス公教育政策の源流』（風間書房、一九七七年）。

(6) なお革命期に、近代的な大学を設立する最初の試みともいうべき「中央学校」が設けられていた。「中央学校」とは、本来、中等教育の上級段階を目標としていたが、「もしこの学校が生き延びたならば、ちょうどドイツで発達したような系統的な研究職の出現、組織的研究体制の出現をもたらしたに違いない」ものであった。しかしこの学校も、ナポレオンによって廃止され、教育と研究を結合させて新たな飛躍を図ることは試みられなかったのである（ベン=デービッド『科学の社会学』潮木・天野訳、至誠堂、一九七四年、一二七ページ）。また一九世紀初頭の仏独両国の高等教育への対応も異なっていた。フランスでは、科学者によって指導された知識人が大学の廃止を求め、その代わりとして、グランド・ゼコールと専門化されたファキュルテを要求した。ところがドイツでは、哲学者と人文学者に指導された知識人が「啓蒙」官僚の主張するフランス型の高等教育改革に反対する立場をとった。ドイツの知識人の関心は、大学の地位向上にあり、それも哲学部（フランスの文・理学部に相当する）の大学内での地位を引

きあげることであった（同書、一五〇ページ）。

(7) Louis Liard, *L'Université de Paris* (Paris, 1909), p. 106 ; Liard, *L'enseignement supérieur en France 1789-1893*, t. II, p. 110.

(8) Victor Karady, Recherches sur la morphologie du corps universitaire littéraire sous la Troisième République, *Mouvement Social*, 96 (1976), pp. 47-48.

(9) 一九世紀を通じて、フランスの中等教育において文学と古典が重視されたのは、ドイツと同様であった。デュモンも「フランスとドイツにおいて古代語は教育の基礎である」と述べている。もっとも「ドイツにおける教育は文献学的で実証的であり、フランスのそれはとくに文学的である」という違いがあった。Albert Dumont, Les études d'érudition en France et en Allemagne, *RDM* (15 octobre 1874), p. 775. なお最近、望田幸男編『国際比較近代中等教育の構造と機能』（名古屋大学出版会、一九九〇年）が出版された。

(10) Croiset, Durkheim, Lavisse et al., *La vie universitaire à Paris* (Paris, 1918), p. 41.

(11) カラディは、人文主義的教育の弊害として次の四点を指摘している。①主題選択の偏り。歴史で言えば、民衆文化や社会経済史の視角は生まれない。②研究方法の偏り。事実の観察や実験的手法に反対し宗教的教訓を重視する。③過度の文学的修辞。冗長なレトリックや形式的な措辞を多用している。④学問の社会的効用の否定。つまり社会的に有効な結論を伴う研究テーマを回避する。V. Karady, Forces of Innovation and Inertia in the Late 19th Century French University System, *Westminster Studies in Education*, 2 (1979), p. 79.

(12) *La vie universitaire à Paris*, p. 34, p. 36.

(13) 以上、Albert Duruy, La réforme de l'enseignement supérieur, *RDM* (15 mars 1885), p. 339 ; Albert Dumont, Notes sur l'enseignement supérieur en France, *Revue internationale de l'enseignement*, 8 (1884), p. 224. 以下、この雑誌を *RIE* と略記する。

(14) Roger L. Geiger, Prelude to Reform, the Faculties of Letters in the 1860s, *Historical Reflections*, 7 (1980), p. 347.

(15) Liard, *Universités et Facultés*, p. 55.

(16) 一八九〇年までに、リヨンの理科は三講座（応用化学、一般生理学、天文学）、文科は六講座（地理、ギリシア・ラテン古代、ギ

リシア語・ギリシア文学、中世史、中世文学、サンスクリット語・比較文法）の増設を見た。Liard, *Universités et Facultés*, pp. 55-56.

(17) 一八八五年には一七講座三五講義、一九〇八年には、七五の授業と七五人の教官を数えるまでになった。Liard, *L'Université de Paris*, pp. 96, 103-104 ; A. Duruy, La réforme de l'enseignement supérieur, p. 339.

(18) 以上、Louis Trenard, *Salvandy en son temps 1795-1856* (Lille, 1968), pp. 442, 445, 451, 455, 462-463.

(19) Liard, *Universités et Facultés*, p. 52.

(20) Karady, Recherches sur la morphologie, *op. cit.*, p. 48.

(21) Karady, Forces of Innovation, *op. cit.*, p. 77.

(22) したがってパリ医科ファキュルテ教授のレオン・ルフォールは、ドイツの医学者が「科学のなかで科学によって科学のために生きていること」に羨望の眼差しを送った。Allan Mitchell, *Victors and Vanquished : The German Influence on Army and Church in France after 1870* (Chapel Hill, 1984), p. 215.

(23) Ernest Renan, L'Instruction supérieure en France, *RDM*, 51 (1864), p. 87.

(24) Geiger, *op. cit.*, p. 344.

(25) Karady, Recherches sur la morphologie..., p. 66. 改革の成果が現れたのか、一九世紀末には、非ノルマリアンの合格年齢は、二八歳と若くなった。

(26) 以上、Liard, *Universités et Facultés*, pp. 61-63. なお六九年の全ファキュルテの学生数は、九、五二二人であり、そのうち法科の学生は、五、二二〇人を占めた。

(27) *La vie universitaire à Paris*, p. 28.

(28) E. Durkheim, La philosophie dans les universités allemandes, *RIE*, 13 (1887), p. 423. このなかでデュルケームは、ヴントの実験心理学ゼミナールを詳細に紹介している。またデュルケームは、歴史学と同じく哲学もフランスの国民教育に奉仕すべきこと、ドイツの道徳科学や社会科学をフランスに導入すべきことを説いている（*Ibid.*, pp. 439-440.）。

(29) Weisz, *The Emergence of Modern Universities in France*, pp. 24-27.

(30) Dumont, Notes sur l'enseignement supérieur en France, p. 204.

(31) 二〇世紀に入っても数は減ったが、公開講義は続けられていた。パリ大学文学部でも、一九〇八年に公開講義がまだ行われている。Liard, *L'Université de Paris*, p. 103, p. 105.

(32) Ernest Lavisse, L'enseignement historique en Sorbonne et l'éducation nationale, *RDM*, 49 (1882), p. 885.

(33) A. Duruy, La réforme de l'enseignement supérieur, pp. 342-344.

(34) Liard, *Universités et Facultés*, p. 47.

(35) Liard, *L'enseignement supérieur en France*, t. II, pp. 271-276 ; Liard, *Universités et Facultés*, pp. 13-24.

(36) いわゆる一九世紀フランスの科学の「衰退」説とそれへの批判については、R. Fox and G. Weisz, The Institutional Basis of French Science in the Nineteenth Century, in Fox and Weisz eds, *The Organization of Science and Technology in France 1808-1914* (Cambridge, 1980), pp. 21-28 ; Harry W. Paul, The Issue of Decline in Nineteenth-Century French Science, *French Historical Studies*, 8 (1972) ; H. W. Paul, The Debate over the Bankruptcy of Science in 1895, *French Historical Studies*, 5 (1968) ; R. Fox, The Savant confronts his Peers, Scientific Societies in France 1815-1914, in Fox and Weisz, *op. cit.*

二　改革への序曲

このような高等教育の状態にたいして、批判がなかったわけではない。七月王政期に、小規模なファキュルテを統廃合して、地方に二〜三の学問の一大センターを作る試みがなされたり[1]、第二共和政期に、もとサン=シモン主義者のイポリット・カルノーによって行政学院が作られ、新たな時代の要請にみあう制度が志向されたりした。しかしこれらの試みはともに、激しい政治闘争に巻きこまれたり、行政学院のように、既得権の侵害を恐れるファキュルテからの反対に直面して実を結ばなかったのである[2]。カルノーの意思は、一八七二年に創設された私立政治学院 Ecole Libre

des Sciences Politiques によって、蘇るであろう。[3]

第二帝政期の教育政策の特徴は、ナポレオンの大学を自治的団体から官僚制によって統制された組織へと変えたことである。[4] 公教育大臣の権威は絶大であり、その権限は、大学区長と視学総監の二つの回路を通じて行使された。大学区長は、いわば教育界の県知事であったし、視学総監は、中等教育と高等教育の監督に当たった。高等教育における視学総監の制度は、フランス独自のものであり、その重要な職務は、教職員の勤務評定にあった。こうして権威帝政期に、大学にたいする統制は強められた。ある同時代人は、ファルー法の時代を「大学のバビロン捕囚」の時代と呼んでいるし、リアールは「第二帝政の初期は、今世紀の公教育が通過せねばならなかった最悪の時代であった」と記している。[5]

その例を、いくつか挙げよう。[6] 第二帝政は、「ルイ・ボナパルトのブリュメール一八日」に反対した五四名の教授と一〇六名の教諭の逮捕から始まった。ファキュルテがそれまでもっていた自治の権限のいくつかは、国家にとりあげられた。たとえば、ファキュルテの教授任免権が公教育大臣の権限とされたり（一八五二年）、諮問機関である公教育評議会 Conseil de l'Instruction publique の構成が変わって、大学人は少数派となり（二八人中の八人）、その指導権は、宗教人や視学総監や大学区長の手に移されたり、第一帝政下では所有を許されていたファキュルテの資本や不動産も、国家に没収されたりした。また自由主義の一掃という政治的理由で、ヴィクトール・クーザン、フランソワ・ギゾー、ジュール・ミシュレ、エドガール・キネー、ジュール・シモンといった著名な哲学者や歴史家が教壇を逐われたり、思想的偏向という理由で、ソルボンヌLの哲学講座が比較文法講座に、パリ法科ファキュルテの憲法学講座がローマ法講座にそれぞれ変更され、しかも文科ファキュルテの教授は毎年、講義要目を大学区長に報告して認可を求めることが義務づけられたりした。六種類あったアグレガシオンが、二つに再編されたのも同様の理由にもとづく。

教師に髭を剃ることを命じたのも、この時代である。さらに『イエス伝』によって新しい聖書解釈を提示したエルネスト・ルナンが、そのためにコレージュ・ド・フランスを逐われたのは、一八六三年のことであった。[7]

一八五一年に公教育大臣となったフォルトゥル（一八五一―五六在職）も、高等教育の分野では、実質的な改革は実行しなかったといってよい。一八五〇年のファルー法も、高等教育については沈黙したままである。フォルトゥルは、一方で、公教育評議会の常設部会を解散して大学人を追い出し、集権的な行政を進めた。しかし他方で、五四年に三つの文科ファキュルテと五つの理科ファキュルテを新設したり、ファキュルテの教授の要件（三〇歳・博士号の取得者・ファキュルテで二年間の講義経験）を定めたり、アグレガシオン合格者に小講義をする資格を与えたり、法科と医科の学生を文科と理科の講義に出席させたり、教授に三年周期で講義をまとめる（歴史であれば、古代史・中世史・近代史を三年で教える）よう義務づけたりした。その意図は、ファキュルテに学生と充実した講義を与えることであったが、これらの施策は、余り効果をあげず、フォルトゥルの高等教育改革は失敗した。この時期、ソルボンヌSに生理学、自然史博物館に古生物学、コレージュ・ド・フランスに碑銘学などの講座が新設された。ソルボンヌSの生理学講座は、第二帝政がソルボンヌに設けた唯一の講座である。フォルトゥルの後任のギュスターヴ・ルラン（一八五六―六三在職）も、法科と医科のファキュルテの新設を認可し、高等師範の理科課程にルイ・パストゥールを任命して科学研究を振い興そうとしたこと以外には、重要なことをしなかった。[8]

古典的人文主義的な教養教育を重視する中等教育に付与された重要性と比べて、ファキュルテの教育は注目を集めなかった。大学が生みだす科学研究の効用というものに、議会や産業界の名士たちは、まだ気づいていなかった。産業の飛躍的発達を見た第二帝政期は、中等以下のレベルで、産業界を中心に職業的な技術教育への期待が高まっていたが、そのうねりは高等教育まで及ばなかったのである。[9] コレージュ・ド・フランスのラテン文学教授ボワシエは、

六八年に、議会は学者より工場を重視し、純理よりもすぐに役立つ実用的な事柄にのみ執心していると不満を記している。[10] このような教育観は、一八八〇年代でもなお存続していた。それは高等教育局長のデュモンとコレージュ・ド・フランスの化学教授ベルトロが、ドイツとの比較で次のように述べざるをえなかったところにも窺いうる。デュモンは、「国民の知的統一」を作りあげたことによって全ドイツ人に尊敬されているドイツの大学が、「ドイツ精神にたえず生命を吹きこみ、同時に商工業の富のために働く」と述べた。[11] またベルトロは、高等教育がフランス産業の物質的利益とも関係があるという考え方は、「金融家を驚かすであろう」と述べ、さらにドイツが毎年、多額の予算を計上して建設している研究所や実験室は、「一種の知的工場」であり、この「知的工場」は科学的発見と学生の育成を主な目的としており、化学染科の発見と化学工業の発達に見られるように、その成果は私企業にすぐに活かされると記した。このように大学の実験室から生まれる研究成果が、産業に利益をもたらすことを、すなわち「科学の経済的役割」を、ベルトロが説かねばならない状況があったのである。[12]

ともあれ一八六〇年代初めまでの「知的貧困の時代」[13]に、終止符を打つべく登場したのがデュリュイであった。[14] デュリュイの大臣任命は、六三年の総選挙で共和勢力が、五議席から一七議席へと躍進したことの回答でもあった。一八六三年六月に、ヴィクトール・デュリュイが公教育大臣に就任し、教育行政の転換が図られる。それとともに、改革派の教授たちが声をあげ始める。「わが高等教育が招いた批判のすべてが凝縮されていた」と評価されるルナンの論文、「フランスの高等教育」が、『両世界評論』に掲載されたのは、六四年のことである。[15] デュリュイ公教育大臣の登場とルナン論文の公表によって、改革の気運は一気に高まった。

たしかにデュリュイは、フランスの教育史上、多くの業績を残した。しかしかれも、高等教育の分野では大胆なことをなしえなかった。何といっても財政的裏づけがなかったし、穏健とはいえかれのリベラルで反教権的な信条にた

いして、保守派の抵抗があったからである。大臣に就任そうそう、かれは皇帝に教育改革の指針をしたためたが、高等教育についてはわずか「眠気を誘うたるみを矯正すること」[16]、と一項目しかなかった。まずデュリュイは、現状を確認するために実態調査に乗りだす。一八六五年から六六年にかけてフランスはもちろんのこと、比較検討するために外国（イギリス・ベルギー・ドイツ）にも情報収集の手はのばされた。大使や領事などの外交官も、このために動員された。ケーニヒスベルク駐在の副領事は、ここの大学についてのすばらしい報告を送ってきた。ドゥーエ文科ファキュルテの教授がドイツに派遣されもした。こうして多くの報告書がパリに送られた[17]。その成果が、一八六八年に公表された『高等教育統計』である。この調査は、既述したようなフランスの高等教育の惨状を明らかにしたのである。なおデュリュイは、六八年に、秘書で歴史家のエルネスト・ラヴィスを高等教育制度を比較するためにドイツへ差遣してもいた[18]。

このような状況を前にデュリュイは、物質的・財政的方策と行政的・教育的方策の二方策によって対策を講じた。かれは、高等教育の研究環境を整備し、ファキュルテに自治を与える方向で行動を開始する。自治の面ではすでに六三年七月に、教授職の任命と解任という大臣権限を自ら制限し、この問題については公教育評議会の特別委員会に諮問すべきとした[19]。研究面では、教授に「実験室」と「真の学生」を与える努力がなされた。当時、「実験室」は「科学の兵器廠[20]」と位置づけられ、パストゥールやベルトロ、それにクロード・ベルナールたちのために、研究所の建設や実験室の設置が推進された。この結果、六九―七〇年には四二の実験と演習が開講されたと言われる。

法科に殺到する学生に対処すべく、ナンシーとドゥーエに法科ファキュルテが新設された。講座や科目の新設もあいついだ[21]。パリの法科に経済学講座[22]、ストラスブールの医科に臨床病理学講座、コレージュ・ド・フランスに経済地理・医学史の講座と有機化学・一般文法・比較言語学の科目、高等師範に哲学史講座、東洋語学校に日本語・チベッ

ト語・モンゴル語などの科目が新しく設けられたのである。また「危険な学問」とされていた哲学のアグレガシオンが再導入され、リセに現代史教育と地理教育[23]とが導入された。六四年には、現代語 langues vivantes（ドイツ語・英語）のアグレガシオンも設けられた[24]。それは、ギリシア・ラテンの古典語重視から脱却する第一歩であった。一八六二年に、二年間の病院実習を義務づけられた医科ファキュルテにたいしては、アグレジェ（教授資格者）に補助講義をさせて、講義科目の増加を図った[25]。

デュリュイは『高等教育統計』のなかで、自然科学の講座数の増加と図書館や学術雑誌の予算の増額、それに研究者に外国留学の機会を増やすことの必要性を論じていた。しかし不幸にも逼迫する財政事情のゆえに、デュリュイはこれらの方針にそって行動しえなかった。メキシコへの学術探検や、ボルタの電池の応用研究を奨励するために五万フランの賞を設けたり、気象台を建設することなどしかなしえなかったのである。

一八六九年にデュリュイは、教授給与の改善のために四三万九千フランを当てた。というのは表Xに見られるように、教授給与の格差は甚だしかったからである。パリと地方、法・医ファキュルテと文・理ファキュルテの間の給与面の溝は深かった。ソルボンヌの教授は、高等専門学校その他の教授や行政のポストを兼任していることも多く、それが収入増につながったのである。また地

表X　1865年の教授給与（フラン）

	法科		医科		理科		文科	
	固定給	臨時給	固定給	臨時給	固定給	臨時給	固定給	臨時給
パリ	5,400	6,600	7,000	3,022	7,500	5,000	7,500	5,000
地方	3,000	2,150-4,400	4,800-5,000	1,201-1,815	4,000	680-2,637	4,000	680-2,637

出典　Weisz, *The Emergence...*, p. 58.

注：高等師範の助教授で1,200-7,000フラン，コレージュ・ド・フランスで7,500フラン，自然史博物館で7,500フランの給与が支給された。

方の教授は、パリの有名リセの教授の給与より低かった。この表には表れていないが、さまざまな副業のある法科と医科の教授は、文科と理科の教授よりも実際は高給取りであった。さらにドイツの教授との懸隔は大きかった。一八七二年にポール・ベールは記した。「ドイツでは教授はもっとも名誉ある公務員であるだけでなく、しばしば高給取りでもある」[26]。

「真の学生」を生みだす努力も報いられなかった。医科と法科を除き、当時のフランスに存在した学生とは、少数の学士号やアグレガシオンの受験生のことであった。デュリュイは「真の学生」を創出すべく、中等師範学校を作るようにファキュルテに訴えた。その目的は、地方にも学士号やアグレガシオンの受験生を生みだし、ファキュルテの教育を活性化することであった。しかしファキュルテは聞きいれなかった。ソルボンヌも、その課題は高等師範で十分だと考えていた。この時期、ソルボンヌLの一二人の教授は、その倍ほどの人数でしかない奨学生のために何もしなかったのである[27]。一八六五年のソルボンヌLの登録学生数は、四〇人であり、文科ファキュルテ全体でも一一七人であった[28]。

高等教育の分野におけるデュリュイの最大の功績は、何といっても高等研究院[29] Ecole Pratique des Hautes Etudes の設置である。高等研究院は今日も存続し、フランスの学問に大きな影響を与えている。アナール学派の拠点となった社会科学高等研究院は、ここの第六部が分離独立したものであることは、周知の事実であろう。高等研究院は、パリの学術研究を調整し、フランスに研究者を与えるべく考案された。高等研究院は、学位試験のための場ではなくて、無私の科学研究のための場とされた。高等研究院は、教育に予算を計上する気のない議会と、既得権に執着して現状維持をモットーとし、改革に抵抗するファキュルテに直面した大臣が、「一本のペンと一枚の紙」から、すなわち経費もかけずに作りだした機関であった。このため高等研究院は、独自の建物も独自の実験室ももっていなかった。大学

図書館の一室を間借りしたり、自然史博物館、コレージュ・ド・フランス、高等師範などの実験室を借用したのである。

高等研究院は、一八六八年に四つの部門をもって発足した。[30] 第一部が数学、第二部が物理・化学、第三部が生物学、第四部が歴史・文献学を担当した。この機構から二つの特徴を読みとることができる。第一に自然科学の重視、第二に唯一の文系部門が伝統的な文学・古典ではなくて、歴史・文献学であったことである。[31] 歴史家デュリュイのイニシアティヴが、あったのかもしれない。というのもデュリュイは、大臣就任そうそうに、歴史学教授に「君主と戦争の歴史」を放棄し、「経済的事実」を重視すべきことを述べた命令（一八六三年九月二四日）を発していたし、[32] またかれは「物語る歴史は芸術であり、法則のもとに現象を説明し分類する歴史は……科学である」という実証主義的な歴史観をもっていたからである。[33]

ともあれ四部門は、同一の目的と方法をもった。高等研究院は、科学研究と理論研究の追究に貢献するために考案された。「真の学生」に方法を教えることが眼目とされた。なぜなら当時のフランスには、ドイツの歴史家ジーベルが批判したように、結果のみが教えられ過程や方法が教えられていなかったからである。[34]「実習 pratique」という名は斬新さを狙って命名されたが、その名称は、学生に研究と理論において実習経験を与えることを意味した。それはいわば「方法は理論よりもむしろ実習のうちに存する」[35]という、デカルト精神の具現でもあった。かくして高等研究院は、フランスで最初のゼミナール方式を採用した高等教育機関となった。教育と研究の自由が与えられていたし、年齢制限もなく、フランス人にも外国人にも開かれていた。もっとも初期には、男子学生のみ入学が許された。入試はなかったが、学位授与権ももっていなかった。学位授与権はファキュルテの既得権であり、それを侵害できなかったのであろう。学生は入学後ふるいにかけられ、やる気のない学生は指導教官によって除籍された。もっとも、高等研究院

が安定した発展の時期を迎えるのは、一八七〇年代後半のことである。一八八三年には、第四部だけで、学生数二三八人、講義数二八〜三〇、双書は五七冊目を数えるにいたっている。[36]

以上のように、六〇年代にデュリュイによって奏でられた改革の序曲は、六九年七月に、デュリュイが大臣を解任されたことによって中断した。さらに普仏戦争によって、デュリュイの改革は遷延させられた。しかし、敗戦によって改革の必要性と緊急性は、より強く意識されるようになる。敗戦の衝撃によって高等教育の改革は、学問の問題であるにとどまらず、愛国主義の問題ともなったからである。その際、改革の指針として脚光を浴びたのが、デュリュイの仕事であった。またデュリュイの改革は、公教育省と大学の協力が不可欠なことも示した。デュリュイの在任中には、「大臣と大学人との間に信頼と友情の絆があった」[37]からである。この教訓は、第三共和政になって活かされるはずである。なぜなら、第二帝政までの教育改革が実を結ばなかった一因は、学界の支持を欠いたことにあったからである。

(1) 一八三一年にドイツの公教育制度を視察したクーザンは、「われわれは全土に散在する貧弱なファキュルテを持っています。無力に病みおとろえたこの貧弱な地方ファキュルテの代わりに、学問の一大中心をもってすることで、ドイツのような若干の完備した大学をおくことを急ごうではありませんか」と述べていた。『世界教育史大系　26　大学史』前掲、二四四ページ。なお七月王政期には、ギゾーとクーザンに代表されるファキュルテの集中案と、ヴィルマンとサルヴァンディに代表されるファキュルテの分散案とが対立していた(Trenard, *op. cit.*, p. 446.)。

(2) George Weisz, The Anatomy of University Reform 1863-1914, *Historical Reflections*, 7 (1980), p. 366. 半年ほどで行政学院が廃校になった理由の一つは、中級の公務員養成を目的としていた法科ファキュルテの反対である(Vincent Wright, L'École Nationale d'Administration de 1848-1849, *Revue historique*, 255, 1976, pp. 27-28.)。以下、この雑誌を *RH* と略記する。

(3) Pierre Rain, *L'Ecole Libre des Sciences Politiques 1871-1945* (Paris, 1963); Pierre Favre, Les sciences d'Etat entre

déterminisme et libéralisme, Emile Boutmy et la création de l'Ecole libre des sciences politiques, *Revue française de sociologie*, 22 (1981) ; P. Favre, *Naissances de la science politique en France 1870-1914* (Paris, 1989).

(4) 以下、Geiger, *op. cit.*, pp. 340-341.

(5) Sandra Horvath-Peterson, *Victor Duruy and French Education* (Baton Rouge, 1984), p. 41 ; Liard, *L'enseignement supérieur en France*, t. II, p. 241.

(6) 以下、Liard, *L'enseignement supérieur en France*, t. II, pp. 242-245 ; G. Weisz, Le corps professoral de l'enseignement supérieur et l'idéologie de la réforme universitaire en France 1860-1885, *Revue française de sociologie*, 18 (1977), pp. 203-205 ; Paul Raphael et Maurice Gontard, *Hippolyte Fortoul 1851-1856, Un ministre de l'instruction publique sous l'Empire autoritaire* (Paris, 1975), pp. 66-69, 103-106, 165-170.

(7) Ernest Renan, Destitution d'un professeur au Collège de France, in *Questions contemporaines* (Paris, 1868), pp. 241-250 ; Horvath-Peterson, *op. cit.*, pp. 180-181.

(8) 以上、Liard, *L'enseignement supérieur en France*, t. II, p. 265 ; Horvath-Peterson, *op. cit.*, p. 41, p. 46 ; R. D. Anderson, *Education in France 1848-1870*(Oxford, 1975), pp. 226-227 ; Raphael et Gontard, *op. cit.*, pp. 229-231, 240-241, 333.

(9) パストゥールが学部長であったリールの理科ファキュルテでは、一八五〇年代に、地域の産業にも役立つ教育研究が行われていた(Harry W. Paul, Apollo courts the Vulcans, the Applied Science Institutes in Nineteenth-Century French Science Faculties, in Fox and Weisz, *op. cit.*, p. 156.)。技術教育については、C. R. Day, Education for the Industrial World, Technical and Modern Instruction in France under the Third Republic 1870-1914, in Fox and Weisz, *op. cit.*

(10) Gaston Boissier, Les réformes de l'enseignement, *RDM*, 75 (15 juin 1868), p. 869.

(11) Dumont, Notes sur l'enseignement supérieur en France, p. 219.

(12) 以上、M. Berthelot, L'enseignement supérieur et son outillage, *RIE*, 5 (1883), pp. 391-392.

(13) Ernest Lavisse, Victor Duruy, *Revue de Paris* (15 janvier 1895), p. 249.

(14) デュリュイの大臣任命にいたる経緯とキャリアについては、渡辺和行「歴史家の誕生」『香川法学』第六巻第三号（一九八六年）、三七ページ。

(15) Albert Duruy, *L'Instruction publique et la démocratie 1879-1886* (Paris, 1886), p. 256 ; E. Renan, L'Instruction supérieure en France, *RDM*, 51 (1864).

(16) Horvath-Peterson, *op. cit.*, p. 70.

(17) 以上、Paul Frédéricq, L'enseignement supérieur de l'histoire à Paris, *RIE*, 5 (1883), p. 761.

(18) Horvath-Peterson, *op. cit.*, p. 209.

(19) Weisz, *The Emergence of Modern Universities in France*, p. 60.

(20) これは『高等教育統計』の報告書のなかの言葉である。Albert Duruy, La réforme de l'enseignement supérieur, p. 334.

(21) Horvath-Peterson, *op. cit.*, pp. 187-192.

(22) 本来は、一八四八年の「危険なユートピア的夢想」を打ち砕くという意図で経済学が導入されたのである。第二帝政末期には、ナンシー、グルノーブル、トゥールーズの法科にもこの講座が設けられた(Horvath-Peterson, *op. cit.*, p. 188.)。cf., Le Van-Lemesle, La faculté de droit de Paris et l'introduction de l'économie politique dans son enseignement 1864-1878, *Historical Reflections*, 7 (1980) ; Le Van-Lemesle, La promotion de l'économie politique en France aux XIXe siècle jusqu'à son introduction dans les facultés 1815-1881, *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, 27 (1980). すでに七月王政下に経済学を法科フアキュルテに導入する試みがあつたが、法科の反対や経済自由主義への反対などによつて失敗していた。一八九二年までに一三の法科フアキュルテのうちで一一に経済学講座が設けられた。

(23) これ以前の中等教育では、地理は歴史学の付録のような位置にあつた。高等教育機関でも地理が教えられていたのは、サン=シール陸軍士官学校と高等師範のみであつた。Numa Broc, La géographie française face à la science allemande 1870-1914, *Annales de géographie*, 86 (1977), p. 77 ; Broc, L'établissement de la géographie en France 1870-1890, *Annales de géographie*, 83 (1974), pp. 546-547 ; Broc, Histoire de la géographie et nationalisme en France sous la Troisième République 1871-1914, *L' Information historique*, 32 (1970), p. 21.

(24) Albert Duruy, La réforme des études classiques, *RDM*, 61(15 février 1884), p. 857.

(25) Weisz, Reform and Conflict in French Medical Education 1870-1914, in Fox and Weisz, *op. cit.*, p. 64.

(26) Weisz, *The Emergence of Modern Universities in France*, pp. 57-60.

(27) Liard, *L'Université de Paris*, pp. 101-102.

(28) Geiger, *op. cit.*, p. 349.

(29) 高等研究院の設立経緯については、渡辺和行「歴史家の誕生」前掲論文、三七―四一ページ。以下の記述に際して、旧稿とやや重複があることをお断りしておく。

(30) 一八六九年に第五部「経済学・行政学」が設けられることになったが、計画だおれで実現にいたらず、一八八六年に第五部として「宗教学」が設けられた(*La vie universitaire à Paris*, p. 182.)。そして戦後の一九四七年に、第六部「経済・社会科学」が設けられたのである。

(31) 第四部のスタッフでもあったガブリエル・モノーは、一八七六年に高等研究院第四部の役割を次のように位置づけた。高等研究院は、専門教育を行う古文書学院と一般的通史的教育を行う高等師範という「二つの学校の間に有効な絆を創出する」ことを目的としていた。Gabriel Monod, Du progrès des études historiques en France depuis le XVIe siècle, *RH*, 1 (1876), p. 33.

(32) Paul Gerbod, La place de l'histoire dans l'enseignement secondaire de 1802 à 1880, *L'Information historique*, 27 (1965), p. 129. 中等教育において、復古王政期には「危険な科目」として無視されていた歴史学も、一八四五年には、主要な科目として位置づけられ、歴史学教授の地位も向上した。啓蒙的な歴史教科書や歴史の方法・歴史の性質についての哲学的認識論的著作も生まれたが、全般的には、戦争史や文学的修飾の多い歴史書が多かった。ルラン公教育大臣も、歴史学教授が戦史に執着していることに苛立ちを表明している(*Ibid.*, pp. 126-127, 129.)。

(33) Albert duc de Broglie, Victor Duruy, *RDM* (1er février 1898), p. 551. これにたいして息子のアルベール・デュリュイは、伝統的な歴史観をもっていたようである。かれは「中等教育における歴史の内容と魅力は、戦争・外交・偉人や名将の才能による諸国の領域形成の勉学にある」と述べていた。A. Duruy, La réforme des études classiques, pp. 858-859.

(34) Pouchet, *op. cit.*, p. 445.

(35) デカルト『方法序説』落合太郎訳（岩波文庫、一九七二年版）六ページ。

(36) A. Duruy, La réforme de l'enseignement supérieur, p. 336. なおロールによれば、一八六八年一二月の時点で、第四部の学生は六四人であった(Jean Rohr, *Victor Duruy, ministre de Napoléon III*, Paris, 1967, p. 119.)。

(37) Monod, *Portraits et souvenirs* (Paris, 1897), p. 130. デュリュイが始めたのか慣習としてあったのかは不明であるが、デュリュイ

は自ら主催する夜会にノルマリアンを招待し、未来のフランスのエリートと現役の統治エリートとを接触させる機会を設けていた。アルベール・デュモンは、そのような夜会に出席しえたことの感激を綴っている。Lavisse, Albert Dumont, *RIE*, 9 (1885), p. 104.

むすび

一九世紀フランスの教育は、中央集権主義とエリート主義、古典教育の重視(裏をかえせば技術教育の軽視)、乏しい教育予算などによって特徴づけられる。このため教育環境は、教える側と教えられる側の双方にとって劣悪であった。それが、一九世紀フランスの高等教育の惨状をよぎなくしたのである。デュリュイの改革は、為政者の間にもそのような認識があったことを示している。しかし第二帝政は、抜本的な改革をなすすべもなく、普仏戦争の敗北とともに瓦解した。敗戦は、改革を求める圧力を増大させた。医学教育の発達による健康の増進は、「科学」の威信を高めたが、それは学問の自由や大学の自治、研究費の増額を求める改革派の要求に棹さすことになった。

したがって帝政下で奏でられた改革の序曲は、第三共和政へともちこされた。デュリュイの改革指針は、共和政下で改革のシナリオとして役立てられた。そこで新たにタクトを振ったのが、「科学」と「祖国」と「自由」を重視する共和派の教授たちであった。かくして第三共和政期の教育改革の俳優と舞台の条件は整ったのである。